２０２１年度

東洋大学審査学位論文 要約

戦国期初頭の将軍と大名

文学研究科史学専攻博士後期課程

４１６０１３０００１　小池辰典

課程博士論文「戦国期初頭の将軍と大名」目次

序章……１頁

第一章、鈎の陣にみる戦国初頭の将軍と諸大名

はじめに……１５頁
第一節、鈎の陣の長期化理由……１６頁
　第一項、鈎の陣の展開とその長期化について……１６頁
　第二項、細川政元の鈎参陣……１８頁
　第三項、足利義尚の鈎陣替……２０頁
第二節、越前・伊勢・美濃について……２１頁
　第一項、追討対象たち……２２頁
　第二項、美濃の動向……２３頁
第三節、諸大名の参陣……２５頁
　第一項、山名家の参陣……２５頁
　第二項、大内家の動向……２８頁
おわりに……３０頁

第二章、明応の政変における諸大名の動向

はじめに……４０頁
第一節、動座における諸大名動向の再検討……４２頁
　第一項、先行研究の動座像……４２頁
　第二項、動座の展開に関する検討……４４頁
　第三項、動座と将軍側近葉室光忠……４７頁
第二節、政変における諸大名動向の再検討……５０頁
　第一項、先行研究における政変時の諸大名動向……５０頁
　第二項、政変初頭における諸大名の動向……５３頁
　第三項、赤松家の兵粮搬入問題……５４頁
　第四項、「訴訟」としての「政変」 ……５６頁
　第五項、「御所巻」としての政変 ……５７頁
おわりに……５９頁

第三章、六角家の家督問題にみる足利義澄陣営の構造

～赤松政則の動向を中心に～

はじめに……７１頁
第一節、六角惣領職の交代……７２頁
　第一項、佐々木山内家……７２頁
　第二項、六角高頼の没落……７４頁
　第三項、山内就綱の惣領拝命……７５頁
第二節、山内就綱の近江入部……７７頁
　第一項、近江入部と比叡山及び将軍家……７７頁
　第二項、近江入部と京兆家……７８頁
　第三項、近江入部と赤松家……７９頁
おわりに……８１頁

第四章、明応の政変後の争乱における畠山義豊

はじめに……９０頁
第一節、畠山義豊について……９２頁
第二節、明応二年（一四九三）の追討……９４頁
第三節、義澄陣営と争乱……９６頁
第四節、明応四年（一四九五）の和平案と遊佐弥六……９８頁
第五節、山城占拠の顛末……１００頁
第六節、畠山義豊の討ち死に……１０２頁
おわりに……１０５頁

第五章、第二次足利義材政権の成立過程と畠山尚順

～諸大名の動向を踏まえ～

はじめに……１１２頁
第一節、北陸脱出後の将軍足利義材……１１４頁
　第一項、諸国との提携……１１４頁
　第二項、明応三年（一四九四）の紀伊―越中……１１６頁

第二節、畠山尚順の勢力拡大と将軍足利義材……１２０頁
第一項、義材方の混乱と畠山尚順……１２０頁
第二項、「河州」畠山尚順と大友家の家督問題 ……１２２頁
第三節、明応六年（一四九七）の和平交渉と破綻……１２５頁
第一項、将軍義材近辺の動向……１２５頁
第二項、和平交渉と畠山尚順……１２７頁
第三項、和平交渉の破綻と畠山尚順……１２８頁
第四節、足利義材の西国退去と反撃……１３１頁
第一項、義材の西国退去と薬師寺元一の乱……１３１頁
第二項、足利義材の帰還……１３３頁
第三項、第二次政権において……１３６頁
おわりに……１３８頁

第六章、十五世紀後半を中心とした「大名」について
はじめに……１４９頁
第一節、故実書中の「大名」……１５１頁
第二節、日記にみる「大名」……１５８頁
第三節、「大名」の提言 ……１６３頁
おわりに……１６７頁

終章……１７４頁

序章

博士論文では、応仁・文明の乱（以後、大乱）や明応の政変（以後、政変）が発生した十五世紀後半および十六世紀前半をもって戦国期初頭とみなし、当該期における政治構造の解明を進めつつ、将軍と大名の関係について言及した。

ちなみに、十代将軍は義材・義尹・義稙と改名していったが、便宜上、義材で統一する。十一代将軍は、義遐・義高・義澄と改名したが、こちらは義澄で統一する。

また、足利義澄を擁立して将軍足利義材を追い落とした政変後に争乱が始まったが、その争乱に関して、政変で成立した新体制側を義澄陣営と記し、政変で追い落とされるも北陸で挙兵した将軍義材側を義材陣営と記すことにした。

さて、かつて戦国期の将軍は有力大名の傀儡に過ぎないとみなされてきた。しかし、幕府の構造解明が進んだことや、将軍は栄典授与などを通じて戦国大名に対して影響力を発揮していたことが十六世紀中頃以後を中心とした研究によってわかってきた。これらの研究進展によって現在では、将軍は自律性を維持しており、影響力も備えた存在だと捉えられるようになってきている。

だが戦国期初頭に関しては「大乱」や「政変」という事件に支えられた下剋上史観のもと、将軍とは衰退する存在であるという認識が根強く残っており、当該期に関する将軍の動向を踏まえた研究は、最近になってようやく進み始めたところである。

そのため、冒頭のように政治構造について踏み込み、また、将軍は諸大名に見放されて衰退していくかどうかを検討することを目指した。それに際し、細川京兆家―三好家研究を中心に進められてきた畿内政治史を諸大名の動きを踏まえて相対化しようとする研究動向を意識しつつ、将軍の権威的側面についても留意しながら検討を進めた。

第一章「鉤（まがり）の陣にみる戦国初頭の将軍と諸大名」

応仁・文明の乱（以後、大乱）の影響を示す代表的な事例として、大乱終結から十年後の長享元年（一四八七）九月に始まった鉤の陣がある。これは、九代将軍の足利義尚が、押領されていた寺社本所領・将軍直臣領の返還を掲げてはじめた遠征である。

従来、この遠征に対し、諸大名は押領地の返還を嫌って参加せず、有力大名も代理を送るばかりで、参陣した細川京兆家にいたっては、討伐対象の六角高頼と通じ、遠征を破綻させたと捉えられ、大乱後の将軍衰退を示す代表的な事例として、通史などで叙述されてきた。

第一節では、この遠征が長期化した理由を探った。先ず、細川京兆家が妨害したという先行研究の指摘だが、それは一部重臣の問題であり、この問題発生後、京兆家当主の細川政元は将軍に赦しを請い続けて遠征に復帰したことを確認した。また、六角家の攻略は遠征開始から二週間ほどで終えており、遠征が長期化したのは、将軍が美濃や越前といった諸国の問題の解決に乗り出したためであったことをあきらかにした。

第二節では、六角家以外の追討対象になった家々に注目した。越前の朝倉貞景は赦免を求めて早期に赦され、幼少の貞景に代わり、大叔父の敦賀郡司である朝倉景冬が上洛して、銀閣寺の作庭を担うなどして将軍家の歓心を買おうとした。

また、大乱で西軍の一角を担った土岐家も当主から赦免を求め、押領地の返還に努めるなど交渉を続けた結果、将軍家に赦され、在京を再開したことをあきらかにした。

第三節では、日記などを精査することで、参陣した大名の全容を掴むことに努めた。委細は次頁の【図表】を参照していただきたいが、室町殿御分国（関東・奥羽・九州以外の地域）の大名は、八割ほどが参陣していることがあきらかになった。

その参陣姿勢についても、山名家は参陣許可を求め続けるさまが確認でき、大内家では参陣命令に備えて時限法を調えており、領内の土豪らも大内家は参陣すると認識していたことをあきらかにした。

ところで、この遠征は将軍の病没で中断したのだが、将軍病没を聞きつけた大内家では分国中に服喪を命じた。そこからは、大乱後も大名が将軍を推戴するさまが垣間見え、興味深い事例といえるだろう。

以上から、本稿で鉤の陣とは、大乱後の将軍衰退を示す事例ではなく、むしろ大乱を経ても依然として、将軍の諸大名に対する求心力が確認できる事例だと指摘した。

《図表》鈎の陣の参陣大名家一覧

＼	当主	備考	領国	代理
1	赤松政則	四職	播磨	○
			備前	
			美作	
2	朝倉貞景		越前	○
3	一色義直	四職	丹後	○
4	大内政弘	九州 副探題	周防	○
			長門	
			筑前	
			豊前	
5	北畠政郷	国司	伊勢	
			志摩	
6	京極高清	四職 （分裂中）	北近江	
7	京極政経		出雲	
			隠岐	
8	斯波義寛	管領家	尾張	
			遠江	
9	武田国信		若狭	
10	富樫政親		加賀	

＼	当主	備考	領国	代理
11	土岐成頼		美濃	
12	畠山政長	管領家 （政長流）	紀伊	○
			越中	
13	細川政元	管領家 （京兆家）	丹波	
			摂津	
			讃岐	
			土佐	
14	細川政之		阿波	
15	細川元有	上守護	和泉	
16	細川基経	下守護		
17	細川勝久		備中	
18	細川尚春		淡路	
19	山名政豊	四職 （宗家）	但馬 備後	○
20	山名豊時		因幡	△
21	山名尚之		伯耆	

不参加・動向不明			備考	動向不明
＼	当主	領国		
22	今川氏親	駿河	対関東	
23	小笠原長朝	信濃	対関東	
24	上杉房定	越後	代理？	
25	河野通宣	伊予		
26	仁木政長	伊賀		○
27	畠山義統	能登		○
28	興福寺	大和	守護	

討伐対象			備考
29	六角高頼	南近江	
30	畠山義就	河内	管領家 （義就流）

＊関東は争乱中。

＊拙稿「「応仁の乱」後、足利将軍家は没落したのか？」
（山田康弘編『戦国期足利将軍研究の最前線』山川出版、二〇二〇年）を改変。

＊因幡の山名豊時は在国しており、息豊重が参陣した。ただ、当時の日記には豊重を守護と記載するものもある。それを踏まえるに、この時期、京都における因幡山名家の代表は豊重だと認識されていた可能性もあり、単純に当主代理という言葉で説明してよいものか難しい。

第二章「明応の政変における諸大名の動向」

明応二年（一四九三）二月十五日、将軍足利義材は管領畠山家の家督相続問題において、畠山政長の要請を入れ、畠山基家（後に義豊と改名）を討伐すべく諸大名を率いて遠征（以後、動座と記す）を開始した。その義材留守の京都で、同年四月二十二日に日野富子・細川政元・伊勢貞宗らが、堀越公方足利政知息の足利義澄（当時は、僧形で香厳院清晃）を擁立して反旗を翻し、同年閏四月二十五日に将軍義材を捕えた。この事件が明応の政変（以後、政変と略す）と呼ばれている。

政変の影響について、京兆家による専制体制の確立という見方はされなくなってきている。それは、政変には将軍家の人間も加担して政変後も影響力を発揮していたことや、京兆家をして専制体制を可能にし得たと考えられてきた同族連合体制が実は崩壊し始めていたことが理由である。

そして、政変後の政治構造を考える新たな視角として、現在では、政変で虜囚となるも程なく北陸に逃れて挙兵した足利義材と政変で擁立された足利義澄という二人の将軍の対立に注目された。

以上の研究状況に対し、本稿では、政変後に諸大名を糾合し得た将軍義材が、なぜ政変では諸大名に背かれたのかという疑問から、政変の実態について捉え直すべく、動座に参陣した大名らの動きを追った。

第一節では、政変の直接的な切っ掛けと捉えられてきた畠山基家討伐について考察した。

先行研究ではこの遠征について、大名らは遠征に不満を抱き、「後方」に撤退して将軍を孤立させたと示してきた。

しかし、その「後方」と認識された地域にも基家勢がおり、実際は戦線拡大であったと指摘した。そして、大名らは基家討伐の直前にも近江遠征があり、合戦が連続して行われていることに対して不満を抱いていた節はあるが、それでも遠征への不満を爆発させる程ではなかったと指摘した。

また、遠征は政変が始まる前までは順調に進んでいたとの研究もある。

以上を踏まえ、状況が変化した時期を探ったところ、将軍の側近である葉室光忠が、基家勢との交渉に乗り出した頃からだと指摘した。そして、光忠の介入後、諸大名は動かなくなり、遂に京都で明応の政変が決行されたと指摘した。

第二節では、政変最中の動きを追った。政変決行後、有力大名の斯波義寛・赤松政則らが政変を起こした細川京兆家らの占拠する京都には向かわず、ちょうど京都と将軍陣所の中

間に位置する堺庄に陣取った点に注目し、政変でも特に重要な役割を果たしたと考えられてきた赤松政則に注目した。

その結果、赤松政則・大内義興は、将軍側近の葉室光忠が強権を振るっていることについて抗議しようと細川政元に誘われたからそれに協力した訳であり、将軍を挿げ替えるつもりなど毛頭ないと表明していたことをあきらかにした。また、赤松らの目指したものは、将軍側近といった権勢家を失脚させる際、室町幕府で度々行われてきた御所巻という強訴に類するものだと指摘した。

そして、細川京兆家らが将軍義材の挿げ替えを主張するなか、赤松家は義材と京兆家らとの間に立って仲介役を務めたが、京兆家らに包囲されていた義材側は兵糧がついて投降し、政変は決着がついた。

しかし、赤松政則らは事態がこのように収束したことに不満を抱き、京兆家らと摩擦を起こし続け、その混乱は義材逃亡によって、政変によって擁立された足利義澄と政変で没落しかけるも北陸に逃れて挙兵した足利義材という二人の将軍の対立へと繋がっていくことを提示した。

以上のように、諸大名は政変で将軍を引きずり下ろそうとはしておらず、却って、側近政治を問題視して将軍に是正を求めようとするなど、将軍家の安定化を目指していたと指摘した。

このことからはまた、大乱後も諸大名は将軍家に対する関心を失った訳ではなく、依然、将軍家を重視していたことをあきらかにした。

〔補足〕谷口雄太氏は、細川京兆家にしても下剋上を目指してはおらず、足利義材が将軍では足利将軍家を頂点とした構造の維持に支障が出ると判断し、足利義澄への交代を図った訳で、足利将軍家そのものを損なう行為に及ぼうとした訳ではないと指摘されている。

＊谷口雄太「武家の王としての足利氏像とその形成」(『鎌倉』一二二、二〇一七年)

第三章「六角家の家督問題にみる足利義澄陣営の構造
～赤松政則の動向を中心に～」

政変によって成立した義澄陣営は、細川京兆家と日野富子・伊勢貞宗ら政変を決行した側の将軍家の動向解明が中心であり、諸大名側から義澄陣営を捉える向きは乏しかった。

そこで、政変翌年の明応三年（一四九四）に行われた、近江の六角高頼とその分家である山内就綱が六角家当主の座を争って起こした合戦に注目した。

第一節では、山内六角家や六角高頼の立場について確認した。

山内家とは、南北朝時代に六角家当主となったこともある家で、従う家も多く、山内就綱の父政綱は、幼少で当主となった六角高頼の後見となり、当主代行として将軍足利義政に拝謁するなど、宿老的な立場で六角家を支えた有力者であったことを確認した。

また、六角高頼の立場だが、応仁・文明の乱における押領地の返還を幕府に命じられるも従わず、幾度も追討を受け、そのなかで宿老の山内政綱を失った他、幾度も近江守護職や家督を別な者に変えられるといった苦難に直面しており、義澄陣営においても、赤松家が後押しをする山内就綱が六角家の家督に認定された。ただし、現地を実効支配していたのは六角高頼であった。

第二節では、六角高頼と山内就綱の合戦について、その発端から探った。

そもそもは、比叡山が所領奪還のため、六角高頼討伐を義澄陣営に対して迫ったことに始まっており、山内就綱を義澄陣営の認める六角家当主に据え置くかも問題となった。この事態に際し、以前から六角高頼の赦免で調整しようとしていた細川京兆家は目立った動きを見せなかったが、赤松家が山内就綱の支持にまわって六角高頼討伐の後押しをした結果、山内就綱を大将として比叡山が合力するという形で、山内就綱と六角高頼との合戦は始まったのである。

ちなみに、味方になると比叡山が予測していた美濃の土岐家が六角高頼の支援にまわったことで、赤松家からの増援もあったが、比叡山・山内就綱連合は敗退した。

以上のように、義澄陣営は、細川京兆家の後押しがなくとも、赤松家といった陣営に与する大名の思惑により、大名家の家督問題や合戦を決断していた訳であり、京兆家のみならず、他大名の動向を踏まえた視角が必要になってくるだろう。

この問題は、第四章でも扱う。

第四章「明応の政変後の争乱における畠山義豊」

本章では第三章と同じく、明応の政変によって成立した義澄陣営について、諸大名の動きを踏まえて捉え直すことを目指した。それに辺り、政変で細川京兆家と共に将軍足利義材を捕縛することに向け、直接動いた畠山義豊（分裂した管領家の一方：義就流）に注目した。

先行研究で義豊は、京兆家に従属する存在ともみなされており、この点の再検討も行った。

第一節では、畠山義豊の領地や与党といった基本的事項の確認を行った。

第二節では、将軍義材が政変による虜囚から脱した際の対応に注目し、義澄陣営による義材追討で中核をなしたのは義豊であったことを指摘した。

あわせて、政変後、多数の大名が在京してはいたが、義材と対峙する姿勢をみせたのは、畠山義豊と細川京兆家ばかりであったことも指摘した。

第三節では、将軍義材が北陸に逃れ、義澄陣営との対立姿勢をあきらかにした後の義澄陣営の混乱状況を確認しつつ、義澄陣営側の将軍家と畠山義豊の連携を確認した。

第四節では、畠山義豊の自律性を確認した。対象事例としたのは、京兆家が自家の混乱や義材陣営（主に政長流畠山家）の圧迫を受け、畠山義豊に対し、義豊が管領畠山家の家督をかけてあらそっている政長流畠山家との和平を打診した。それに対し、義豊が反発を示し、京兆家と幕府政所執事の伊勢貞宗が共同統治する山城の南部を制圧した点をあげ、義豊は京兆家に従属する存在ではないと指摘した。

第五節では、第四節でみた混乱の結果を確認した。すなわち、畠山義豊は単独で政長流畠山家の侵攻を退けたが、その隙に京兆家によって山城南部を奪還されるというものであり、両家は歪な連携を継続することになったのである。

第六節では、京兆家が畠山義豊と政長流畠山家を天秤にかけようとしていたことや、政長流との合戦のなかで畠山義豊は討ち死にという顛末にいたったことを確認した。

以上のように、単に京兆家の従属的存在と見做されがちであった畠山義豊の動きを丹念に追い、その専論のような形式をとりつつ、義澄陣営のなかで、それに与する大名が京兆家の思惑とぶつかり合いながら、如何に動いていったかを確認した。

特に興味深いのは、政変後の畿内の合戦は、京兆家を中心にした場合、明応八年（一四八九）の義材陣営との決戦ばかりが強調されがちであったが、実際は畠山義豊を主体として幾度も合戦があった点である。このように京兆家以外からの視角も重要だと確認できた。

第五章「第二次足利義材政権の成立過程と畠山尚順～諸大名の動向を踏まえ～

本章では、第二次義材政権の特徴に迫るべく、その成立過程とも言えよう、明応の政変後に発生した義材陣営と義澄陣営の対立について、将軍足利義材の権力基盤という観点から探った。昨今の研究進展にともなって、義材の権力基盤と捉えられてきたものが、果たして権力基盤といえるような堅固なものであったか不明瞭となった為である。

そこで対象としたのは、義材が長く本拠とした越中を領する畠山尚順（分裂した管領家の一方）である。ちなみに尚順本人は紀伊に在国していた。

また、政変後に成立した権力体が、京兆政権ではなく義澄陣営と言い表せるように、足利義澄が細川京兆家に対して影響力を発揮できたのは、政変に将軍家の人間も参加しており、彼らの存在が、足利義澄が影響力を発揮していく基盤となった。このように、権力体の成立事情は、その権力体の特徴に大きな影響を与えると考えられる為である。

第一節では、政変で一旦は没落した将軍義材が、北陸に逃亡した後、如何にして義材陣営が形成されていったかを確認した。そして、義材と畠山尚順の連携を確認し、尚順が義材の存在を自己の権力基盤強化に用いるだけではなく、義材を支えようと紀伊から西国に対して支援要請を送るといった行動をとっていたことを確認した。

また、義材は西国情勢を踏まえて紀伊の畠山尚順らとの軍事行動を進めようとするなど、広域を見据えながら政変後の政局に臨む姿をあきらかにした。

第二節では、義材を支えていた西国勢・江濃越の連合が混乱に陥るなか、畠山尚順は勢力を拡大させて義澄陣営を圧迫しており、義材はその尚順に大友家の家督問題を諮問するなど、尚順の勢力を頼みにしていく姿をあきらかにした。

一方の尚順も、紀伊や和泉など南方の勢力を糾合していく上で、義材が頂点であることを示し続けており、この尚順を中心とした南方の勢力は、義材の権力基盤といえるものだと指摘した。

第三節では、明応六年（一四九七）に始まる義材陣営と義澄陣営の和平交渉に注目した。先行研究でこの件は、西国勢の混乱により、義澄陣営を武力で打倒できないと考えた越中の神保長誠らが、武力での解決を主張する義材近辺の意見を押しのけて始めたものであり、権力基盤を持たない義材とそれに従う側近らの方針決定能力の弱さを示す事例とされてきた。

これを検討した結果、和平交渉とは神保長誠に収まらず、朝倉貞景といった大名も加わり進めていた政策であり、義材近辺の一部が異論を唱えだしたのは、義澄陣営の細川京兆家の

対応に不信感を覚えたためであった。そして、義材近辺の和平に対する推進派も否定派も畠山尚順に相談を持ちかけ、これを受けて尚順は、自らの進退などもかけて京兆家との交渉に臨み、和平締結寸前まで漕ぎ着けたことを提示した。

また、和平が突如として破綻に向かい両陣営の決戦へと向かった際、西国勢が協力を約束しながらも実際は動かなかったことに異なり、尚順は義材支持を掲げ続けて義澄陣営の本拠である京都近郊まで軍勢を進めていたように、義材を支援する姿勢を貫き通したことをあきらかにした。

第四節では、上記の決戦で将軍義材が潰走し、北陸から西国の大内家のもとへ落ち延びた後の政局を追った。

義材陣営の動きが活発に見え始めるのは、決戦で敗北してから五年後の永正元年（一五〇四）に起きた薬師寺元一の乱からである。元一は京兆家の重臣であったが、家中統制を強める当主細川政元の圧迫を受けており、義材陣営を頼りとして挙兵を企図した。元一は畠山尚順ら義材陣営と合流する前に討たれたが、これを切っ掛けに畠山尚順は再び義澄陣営との戦いをはじめている。

その後、細川政元が家臣に暗殺され、京兆家が家督を巡って混乱に陥るなか、将軍義材は西国勢の力を借りて帰洛に向けて大船団を繰り出し、京兆家でも新当主の細川澄元と関係嫌悪になった細川高国が畠山尚順に与し、義材にくだった。

このような形で第二次政権は始まった。そして、先行研究で提示されているように、第二次政権では、畠山尚順も細川高国・大内義興らと共に中枢をしめた点を確認した。

以上から、政変後の争乱において、将軍足利義材には畠山尚順という権力基盤が存在しており、従来は細川高国に招かれるといった形で第二次政権を開くように捉えるむきもあったが、実際は、義材は自己の権力基盤に支えられながら第二次政権を発足させたことをあきらかにした。

第六章「十五世紀後半を中心とした「大名」について」

応仁・文明の乱（以後、大乱）の影響を示す代表的な事例として、その終結から九年後の一四七七年に記された「京都大名無レ人、細川京兆（政元）外無レ人」（『長興宿禰記』文明十八年八月二十七日条）がある。まさに、大乱で守護の在京原則が崩壊したさまを端的に表すかにみえる事例だが、記録当時、幾人もの守護の在京が確認できるのである。

そもそも、室町幕府については守護大名という学術用語などによって、大名＝守護と捉えがちだが、大名とは当時の辞書でも、有徳人を指す場合があると記されている他、鎌倉府研究では守護と大名を別個なものとして捉えている。そして、昨今、幕府の構造について、大乱以前の時期を対象として、地方統治を担う守護と中央政治を担う在京大名にわけて捉えるべきだという指摘がなされている。以上の研究状況を踏まえ、在京大名について更に掘り下げるべく「大名」という言葉に注目した。

方法として、故実書・日記などで「大名」の特殊な用例がないかを探った。それにより、大乱の前後において、管領・御相伴衆ら幕府の家格秩序において高い立場の家のみを他の家とわけて「大名」と呼んでいる場合があることをあきらかにした。また、幕府の家格秩序は守護職の有無を基準としていない点も指摘した。

この管領・御相伴衆らを指す「大名」の役割について、大乱終結後、大名が将軍のもとに再集結していた時期（足利義尚・足利義材の遠征最中）を対象に探った。それにより、将軍に意見具申できる人材が「大名」と呼ばれていたと指摘した。

また、冒頭の「大名」が京都にいないと公家が記したのは、将軍に意見具申できる人材が領国に下ってしまっている状況を危惧したもので、それは公家が将軍家とも関係密接であり、幕府の状態を気にかけていることがわかると指摘した。

以上により、在京大名を先行研究で「たいめい」と呼ぶべきとの指摘があることに加え、当時の辞書に片仮名で記されていることを踏まえ、本稿で確認した「大名」はタイメイと記すのがよいのではないかと提言した。

終章

博士論文では、戦国期初頭の政治構造に関して解明を進めつつ、将軍と諸大名の関係を見直そうとした。その成果について記述する。

応仁・文明の乱は「大乱」と記し、明応の政変は「政変」と記す。

先ず政治構造だが、将軍・幕府研究を検討する上で非常に深く関わるのが、畿内政治史研究である。その畿内政治史は細川京兆家―三好家研究から始まっており、これを諸大名の動向を踏まえて相対化することが求められている。その点を意識して、本書でも、京兆家の動きは勿論ながら、他大名の動きにも注目して政治構造の解明に取り組んだ。

その際、大名個々の動きだけではなく、将軍家の関与や大名相互の動きによって現れてくる影響を捉えることも目指した。一例として、第三章で確認した比叡山・山内就綱連合と六角高頼の戦いをあげる。従来これは六角家の内紛と見做されてきたものだが、実際は比叡山の強訴を受けた義澄陣営が介入しており、その陣営の内部でも六角攻略に消極的な京兆家と自己利益のために遠征を推進したい赤松家にわかれていた。そして、この合戦を切っ掛けに、それまで「政変」後の争乱で立場を明確にしていなかった美濃の土岐家（宿老の斎藤妙純）が、六角家の支援を表明すると共に義材陣営に加担した。

このように、第三章でみた合戦とは、近江国や六角家の問題に収まらない広域にまたがる問題となっている。こういった個々の家の問題と見做されてきたものを捉え直していくことが重要になってくると考えている。

そして、将軍と諸大名の関係だが、現在、十六世紀中頃を中心とした先行研究の成果によって戦国期の将軍は形骸化した存在ではなく、戦国大名にも影響力を発揮する実体と自律性をもった存在だと捉えるようになってきた。このように解明が進んだことで昨今浮上してきた課題が、将軍が権力を有していたのならば将軍の権威は如何なる状態にあったかという点であり、筆者もこの点からの検討を進めてきた。

そして、博士論文で扱った戦国期初頭だが、この時期に関しては「大乱」「政変」という大事件の影響によって、依然として下剋上史観で捉える向きが強く、将軍と諸大名の関係に関する研究は進まなかった。しかし、博士論文では、「大乱」後や「政変」において、諸大名が将軍の存在を気にかけ、そのもとに集おうとしている姿をあきらかにした。加えていえば、第一章でみたように、将軍が没した後、分国中で喪に服するよう命令を発した西国の実力者である大内家のような存在が確認できる。これを踏まえるに、将軍は戦国期初頭も依然として、「武門の棟梁」として仰がれる存在であったといえよう。

この戦国期初頭の状況を踏まえ、十六世紀中頃から活動を始める宣教師についての先行研究をみたい。その一つに、宣教師は自国のスペイン国王やポルトガル国王を示す際に用い

た「rei」（英語の king に相当）を天皇・将軍・戦国大名に用いたが、天皇あるいは将軍と戦国大名を併記する場合、戦国大名については「統治者」「執政官」などと表記を変えており、また、将軍が「名誉に関することのみにおいては日本全国の君主」などと記されていたという研究がある。十六世紀中頃から日本での活動を開始した宣教師の目に、将軍は戦国大名らを権力でおさえる存在ではないにせよ、名誉的な面において、戦国大名の上位にくる存在として、映ったことがわかる。それには、将軍が戦国大名よりも自身の方が偉いと振る舞うだけではなく、戦国大名側も将軍を推戴する態度を示すなど、双方向の動きが確認できないと、宣教師もこのように判断しないであろう。

この宣教師の認識に重なるものとして、永禄の政変（一五六五）後、大名同士の書状において将軍が「天下諸侍之御主」（『上越市史』別編一「上杉氏文書集」一、四六二号）と表現されたことがあげられよう。

こうしてみるに、戦国期の将軍を検討する際、将軍が「武門の棟梁」という権威的側面を保有していたことを踏まえ、将軍に関わる政治動向などを見直していくことが重要だと考える。例えば、将軍を「武門の棟梁」だと諸大名が認識していたと仮定した際、将軍側につけなかった大名が、如何にして自身にも正当性があるかを他大名などに認識させようとしたかや、将軍家も関与する合戦において当事者ではなく、それを取り巻く大名らが如何なる立場を示していたかなど、検討すべき課題は多くなってくるであろう。

主要参考文献

〔 序章 〕

谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』（吉川弘文館、二〇一九年）、

同『〈武家の王〉足利氏』歴史文化ライブラリー（吉川弘文館、二〇二一年）

古野貢他「シンポジウム 戦国期畿内研究の再構成と「細川両家記」」

（『都市文化研究』一二、二〇一〇年）

山田康弘『戦国時代の足利将軍』歴史文化ライブラリー（吉川弘文館、二〇一一年）

同「戦国期足利将軍存続の諸要因―「利益」・「力」・「価値」―」

（『日本史研究』六七二、二〇一八年）

＊その他、幕府構造の実態に迫った設楽薫氏の諸研究や将軍の栄典に関係する橋本雄氏などの重要な研究は多く、研究史の整理も行ったが、ここでは割愛する。

〔第一章〕鈎の陣にみる戦国初頭の将軍と諸大名

上田浩介「守護在京制解体の画期と幕府求心力についての一考察」

（『新潟史学』六九、二〇一三年）

設楽薫「足利義尚政権考」（『史学雑誌』九八―二、一九八九年）

百瀬今朝雄「応仁・文明の乱」『岩波講座』日本歴史七（岩波書店、一九七六年）

〔第二章〕明応の政変における諸大名の動向

青山英夫「「明応の政変」に関する覚書」（『上智史学』二八、十九八三年）

家永遵嗣「明応二年の政変と堀越公方府の滅亡」

（同『室町幕府将軍権力の研究』東京大学日本史学研究室、一九九五年）

同「将軍権力と大名との関係を見る視点」（『歴史評論』五七二、一九九七年）

今谷明「京兆専制―後期幕府の権力構造―」

（同『室町幕府解体過程の研究』岩波書店、一九八五年）

末柄豊「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化」

（石井進編『中世の法と政治』吉川弘文館、一九九二年）

山田康弘「明応の政変直後の幕府内体制」

（同『戦国期室町幕府と将軍』吉川弘文館、二〇〇〇年）

〔第三章〕六角家の家督問題にみる足利義澄陣営の構造～　赤松政則の動向を中心に～

今谷明「六角征伐」（林屋辰三郎編『新修 大津市史』２、一九七九年）

下坂守「室町・戦国時代の六角氏」

（八日市市教育委員会編『八日市市史』二巻・中世、一九八三年）

村井祐樹「戦国時代佐々木六角氏の動向」

（同『戦国大名佐々木六角氏の基礎研究』思文閣出版、二〇一二年）

〔第四章〕明応の政変後の争乱における畠山義豊

川岡勉「応仁・文明の乱と両畠山氏の合戦」
（編纂委員会『羽曳野市史』第１巻、一九九七年）
小谷利明「畿内戦国期権力と真宗寺院」
（同『畿内戦国期守護と地域社会』清文堂出版、二〇〇三年「初出」二〇〇一年）
森田恭二「畠山尚順と基家の抗争」（同『河内守護畠山氏の研究』近代文芸社、一九九三年）

〔第五章〕第二次足利義材政権の成立過程と畠山尚順　～諸大名の動向を踏まえ～

熱田公･久保尚文「応仁の乱」（楠瀬勝編『富山県史』通史編Ⅱ中世、一九八四年）
家永遵嗣「将軍権力と大名との関係を見る視点」（『歴史評論』五七二、一九九七年）
小谷利明「畠山稙長の動向―永正～天文期の畿内―」
（矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四年）
川口成人「畠山政近の動向と畠山中務少輔家の展開」
（『年報 中世史研究』四五、二〇二〇年）
萩原大輔「足利義尹政権考」（『ヒストリア』二二九、二〇一一年）
山田康弘「明応の政変直後の幕府内体制」
（同『戦国期室町幕府と将軍』吉川弘文館二〇〇〇年）
同「文亀・永正期の将軍義澄の動向」
（同『戦国期室町幕府と将軍』吉川弘文館二〇〇〇年）

〔第六章〕十五世紀後半を中心とした「大名」について

吉田賢司「室町幕府による都鄙の権力編成」
（同『室町幕府軍制の構造と展開』吉川弘文館、二〇一〇年）

〔 終章 〕

木下聡「終章　総括と課題」（同『中世武家官位の研究』吉川弘文館、二〇一一年）
松本和也「宣教師史料から見た日本王権論」『歴史評論』（六八〇、二〇〇六年）
同『イエズス会がみた「日本国王」―天皇・将軍・信長・秀吉―』歴史文化ライブラリー
（吉川弘文館、二〇二〇年）